

## あとがき

本書は、1984年執筆からの論文をまとめたものである。ほとんどは発表時のままであることから、一書としてはまとまりがなく、はなはだ不体裁なものになっている。また現時点からみると古い知見に基づくことに由来する誤解などもある。ただそこで検討されている論点の多くは今なお解明されるべき問題である。この点に、拙稿を一書にまとめて刊行することの現代的意義をみいだしている。

本書は全体を3編に分け、第I編では、社会保障法・社会福祉法領域と民法が重畳している問題を民法の立場から論じた5編の論考を、このテーマに関連する2編の補論とともに収録している。

第II編では、介護保険制度の中で被保険者の不満が大きい要介護認定の問題を、ドイツ法を手がかりにして考察した2編の論考を収録している。

第III編では、大学院生時代に研究を始めた不当利得法に関する2編の論考を収録している。

本書を刊行する上で名前を記して謝意をあらわすべき多くの先生、先輩がいる。しかしここでは、既に鬼籍に入られた2人の先生の思い出を記して、すべての学恩に対する感謝とさせていただく。

まず本書を刊行するについては、恩師の木村常信先生（京都大学名誉教授）への思いがある。

ある時、木村先生から、晩年に刊行された『民法異説の研究』（恒星社厚生閣、1972年）の書名となっている「異説」の説明をいただいたことがある。

「世の中に、学説は通説、多数説、少数説といろいろあるけれど、私の学説は、私だけがとなえていて、誰の支持もない異説です」と自信たっぷりに、笑いもせずおっしゃられたことが、今も私の頭に残っている。

自分の研究（方法）に対する自信、学識および自説に対する信頼、まさに学者の気概をみる思いだった。

本書が異説になりえているか、すなわち私自身が自説を信頼しているか、はなはだおぼつかないことではあるが、ただ異説を目標に研究していたことは、私にとり強い支えであり、誇りでもある。

つぎにドイツ留学のきっかけとなった、田中周友先生（京都大学名誉教授）との思い出を書いておく。

私は70年代に青春を過ごした。混乱した時代だったが、感情も含めて世界は整数のごときもので割っても余りは出ないと信じ、大学院では類型論的手法でドイツ不当利得法を研究していた。たしかにこの研究をまとめた論文（本書第三編第1章）は、加藤雅信先生（当時名古屋大学教授）のご指導とご配慮によって、『判例タイムズ』に掲載され、財団法人・日独文化研究所の研究助成を受けるという榮譽にも浴した。

しかし私の青春は、類型化できない現実が存在すること、人間の営みは文字通り多様であることを生（なま）で体験し、「異なるものが異なるままに共に生きる」ことに思いを巡らすまで終わらなかった。

ドイツ、フライブルグ大学への留学が青春に終止符を打つ契機となった。

田中先生から、さりげなく、しかし心に染みる語り口で幾度となくドイツ留学を勧められた。いま思い返すと、その言葉の一つ一つは、現実の多様性を机上で処理しようとしている私に対する懸念から、研究者としての将来を考えてのご助言であったように思う。とりわけ先生のご自宅でドイツ留学を勧められたことは忘れがたい思い出である。

田中家は700年続く下鴨神社の社家であるため、ご自宅は、下鴨神社に隣接し、源氏物語や枕草子にうたわれたただす糺の森の一角にあった。古い瀟洒な日本住宅で、夏目漱石が短編「京に着ける夜」を執筆し、「虞美人草」の構想を練った部屋がそのまま残されていたり、庭の小流は、鴨長明が「石川や瀬見の小川の清ければ月も流れをたづねてやすむ」（新古今和歌集）と詠んだ「瀬見の小川」であつたりと歴史に囲まれていた。

出発前に一枚の色紙を頂いた。それには、ソフォクレスのアンティゴネの中にある言葉「festinalente」に添えて、「高き志を抱いて大望を期せよ。たゆとることなく前進しよう。春は花、夏のみどりに秋紅葉、冬は雪降る森に君待

つ」と揮毫されていた。今も糺の森に行けば、古代ローマの話を生から少年のようにお聞きできると思うことがある。

還暦をすぎ、たくさんの大切な人がすでに逝ってしまった。

兄に対する思慕にも似た感情を今も持つ杉本明先生（当時京都産業大学教授）がシェイクスピアのテンペストを訳した『嵐』の中の一文を紹介させていただく。台詞はすべて関西弁に訳した曠古の訳業である。

われらとて夢幻の紡ぎの元糸、われらがか細き生涯は眠りを衣とするばかり  
(We are such stuff as dreams are made on, and our little life is rounded  
with a sleep.)

(ウィリアム・シェイクスピア／杉本明訳『嵐』（2003年、晃洋書房）

本書の刊行は、法律文化社の小西英央氏のご厚情により実現したものである。深く感謝申し上げたい。

本書の刊行を準備する中でいくどか父と母の存在を見いだした。限りない感謝の気持ちをもって、次の言葉を捧げる。

あなたの心は、純金のように混ざりけなく、岩のように堅く、水晶のように透明であれ。

(A. シレジウス／植田重雄・加藤智見訳『シレジウス冥想詩集』（1992年、岩波文庫）

最後に、私の研究生生活を支え続けてくれた妻、それもまともきらないさまざまな想念を感情の起伏のままに私が表現しているのに、それをにこにこ笑いながら聞き役に徹してくれた妻に感謝し、本書を捧げる。

平成25年11月吉日

著 者